

メディチ版『聖アントニウスの生涯』(Medic. Palat. 143) と教会政治

茅根紀子 (早稲田大学)

メディチ版『聖アントニウスの生涯』(Medic. Palat. 143) は、15世紀の聖アントニウス修道会士ジャン・ドゥ・モンシェニュ(1390年頃～1460年頃)によって注文され、バーゼル公会議(1431年～1445年)が召集された際、教皇エウゲニウス4世に贈呈された写本である。102葉のフォリオからなり、聖アントニウスの生涯を記した文章に大きな挿絵が添えられた形式となっている。後にメディチ家へ売却され、現在はフィレンツェのラウレンツィアーナ図書館に所蔵されている。興味深い点は、メディチ版に先立つ1424年に、聖アントニウス修道会士グイグエ・ロベールが、ほぼ同じ図像から成るヴァレッタ版『聖アントニウスの生涯』を修道会に寄贈していることである。こちらは、修道会が1777年にマルタ騎士団へ吸収合併された際に騎士団所有となり、現在はマルタ公立図書館所蔵となっている。ヴァレッタ版については1937年にグラハムがモノグラフを著しているが、メディチ版については、比較対象として副次的に扱うにとどまっている。

ジャン・ドゥ・モンシェニュは、代々聖アントニウス修道会とつながりの深いドーフィノワ随一の名家モンシェニュ家に生を受けた。1418年、修道会長であった兄ファルコが死去した際、齢三十に満たずして次期修道会長として選出されるが、教皇マルティヌス5世によって選出結果は一方向的に無効化される。これを不服としたジャンは腹心らと共に修道院に立てこもり反抗したが、教皇勅令により新修道会長を受け入れざるをえなかった。ジャンは、教会大分裂終結後の修道会において混乱を招いた問題多き人物であったが、ランヴェルソ分院改築や母修道院附属聖母聖堂聖三位一体礼拝堂を寄進するなど、熱心な寄進者としての一面もある。またバーゼル公会議においては、エウゲニウス4世に写本を贈呈する一方で、対立教皇フェリクス4世選出の賛同者として立ちまわるなど、教会政治研究の観点からも興味深い人物である。

本発表では2011年2月の現地調査を踏まえ、先行研究が殆どみられないメディチ版を詳細に記述した上で、成立年代や寄進の背景などについて考察する。メディチ版には綴じ部分に複数の修復箇所が見られるが、ヴァレッタ版と比較した場合、誤った順序でフォリオが綴じられている可能性がある。また、教皇エウゲニウス4世の名が記された奥付けの最後の一文が、他の部分と別の手によるものであることから、マルティヌス5世の在位中に、まだ名の知れぬ次の教皇への贈呈品として、ヴァレッタ版と時を近くしてメディチ版が制作された可能性が考えられる。若くして修道会の頂点に上り詰めたジャンは、その地位を失った後も再選出の野心を持ち続け、マルティヌス5世死後の教会政治における戦略的手段として本写本を注文したのである。